

# 会報

愛いっぱいの一万年ロマン

苫小牧縄文会ホームページアドレス <http://www.joumon.org/>

苫小牧縄文会 2008年 10月 第8号

## 三内丸山・八戸是川遺跡見学ツアー

9月13日より15日までの日程で、かねてより、計画されていた縄文遺跡を巡る旅行が実現しました。行程は、13日苫小牧駅より特急にて途中函館で乗り換え、青森駅まで。そこからバスに乗って30分ほどで、三内丸山遺跡に到着、ボランティアガイドの説明を聞きながら約2時間に渉り見学し、当日は青森駅前のホテルにて宿泊した。翌14日は、バスで十和田湖、八甲田連山などを見ながら、八戸博物館、縄文学習館、是川遺跡などを見学し、夜10時発のフェリーに乗船し15日朝7時に苫小牧港に到着しました。この旅の圧巻はやはり、三内丸山のロシアから輸入した栗の大木6本を使った、巨大モニュメントです。しかしガイドの説明を聞いても、建物の用途、形状の意味が良くわからないし、学者の意見も分かれています。又八戸市の名士である泉山岩次郎、斐次郎両氏により発掘、保存された是川考古館に展示している縄文後期、晩期の土器、土偶は見事なものでした。その精巧なつくり、見事なデザインに驚き、633点が国の重要文化財に指定されているのことに納得できました。



三内丸山の巨大モニュメントの前にて

総勢18名、平均年齢60歳の団体旅行は、無事終了しました。



三内丸山遺跡の展示館前

## 『縄文時代』を堪能した旅

森山弘毅

三内丸山は二度目になります。八年前の冬、雪の中の六本柱が印象的で他の建物群とともに、縄文時代の冬の生活を想像するには十分でした。当時はまだ『縄文時遊館』も建てられていなく、今回訪ねて、この数年の三内丸山の充実振りが感慨深い事でした。今回はボランティアガイドが付いてくれてありがたかったですね。何より興味深かったのは『35cm』という「縄文尺」の単位があった、という説明でした。六本柱の柱間がすべて4.2mだというのは聞いていましたが、それが『35cm』の倍数になっている事、六本柱ばかりでなく、たとえば高床式の「第28掘立柱建物」にも適用されていて、長さ9.1m、幅4.9m、高さ7mとすべて『35cm』の倍数になっている事、是は『発見』でした。あとで別の資料で確かめたところ、富山県朝日町不動遺跡の大型住居の柱穴の間隔が2.8m・3.15m・3.5mとの事、『縄文尺』は地域を越えて『時代の単位』だった事が分かって、感銘深いことでした。ボランティアガイドの説明には、他にも味あいたいことがありました。『子供の墓』のところで、梅原猛さんの『アイヌの人の墓と同じだ』という言葉を紹介しながら、ガイドさんはさりげなく『時代を隔てたアイヌの人の墓が縄文時代の墓に似ているということでしょう』と、『個人的に』わざわざ言い添えていたのが印象的でした。アイヌ人と縄文人とを直結する議論が

ある中で、それをやんわりかわしていた、という感じで、面白かったですね。このガイドさんの「個人的」な言葉は、六本柱と夏至の太陽の位置との関係を、ふと漏らしていたのも印象深く、それでも縄文の『栽培・農耕』に関しては、そうは断言せずに、栗の木には『人間の手が関わっていた。』という表現にとどめていたのが面白く、是は『マニュアル通り』だったかな、とも思った事でした。ともあれ、八戸の是川遺跡も含めて、『縄文時代』を愉快地に堪能した旅でした。世話人の皆さんの細やかな心づかいに感謝、感謝です。



是川遺跡の土偶—重要文化財

## 苫小牧の遺跡—7

～縄文時代中期・前半期～

苫小牧市立博物館 主査 赤石慎三

縄文時代中期になると温暖化のピークも過ぎ、次第に寒くなり始める。寒くなるといっても、今よりも暖かかったようで、温暖化の影響がまだ残る頃でもある。中期には、市内240ヶ所ある遺跡のうち107ヶ所と全体の半数近くから遺構や遺跡が発見されている。全国的な傾向でもあるが縄文の最盛期といわれ、他の時期に比べ、人の動きが活発だった事がわかる。自然と共生する縄文人にとって、自然の恵みが豊富に得られる温暖化は、生活の安定をもたらすものであった。食料が安定的に確保できるようになったことで、人口も増加し、狩猟や漁労、採集といった生業活動も活性化し、各所に遺跡を残すようになったと考えられるほかの地域との交流も盛んで、東北北部に中心を持つ円筒土器が前期後半同様、市内の遺跡から見つかっている。又、地元で作られた土器の中に、円筒土器の影響

が色濃く見られるものもある(私が「厚真1式」と型式設定したのもそのひとつである。)南からの影響が強く及んだ時期でもある。住居跡も他の時期にくらべ、多く見つっている。中期前半には、柏原18遺跡、美沢2遺跡で長さ16m以上、美沢東6遺跡では14m以上の大型の住居跡がそれぞれ一軒ずつ見つっている。3軒とも床面に炉がないという特徴がある。大型住居跡は本州では、縄文時代前期から知られているが、共同生活の場、食糧貯蔵庫、共同作業場、集会所などいくつかの機能が想定される。床面に炉がないことから、共同生活の場とは考えにくい。何に使われていたのだろうか。それぞれの遺跡でたった一軒というのも気になる場所である。小林達雄氏は、土偶など何に使われたかわからない道具を『第二の道具』と呼び縄文人の信念や世界観を表す、縄文文化を特徴付けるものとしている。北海道では中期の土偶は少ないが、青森県の三内丸山遺跡では、多量の土偶が発見されている。大型住居跡もそういった縄文人の世界観を現す可能性がある。大規模で日常生活の場とは異なる様相を示すものといえば、静川遺跡の環壕を思い起こされる。人口の増加は、集団の結束に揺らぎをもたらすようになってくる。生活を維持する為に必要だった共同作業にもほころびが見え始めてくる。気持ちをひとつにするためにマツリなど精神的活動が必要になってきたのではないだろうか。縄文時代前期から中期は、生活が安定し、余裕ができてきた事でこうした精神的な活動が定着した頃と思われる。その後、中期後半にはさらに気温が低下し、環境が変化し始める。千歳の丸子山遺跡、苫小牧の静川遺跡で環壕が出現する。

予定抄

11月29日

縄文のタペ

編集後記

三内丸山、八戸是川遺跡見学ツアーの企画を、準備から実行まですべて体験班の方々と世話人の川上氏にやっていただき成功裏に終わりました。又この旅の感想を書いていただいた森山先生にも感謝、感謝です。

会報編集委員会

清野、小川